

日光の山

山の日光の山
前の世の心のこころ
對の葉のもよほす
中 村 嘉 津

よき人のうす絹かつく如くにも白雲かゝる日光の山。
びち／＼と靴にくたくる櫛の實の音も嬉しき朝の森かな。
かはきたる咽喉をうるほす一房の山葡萄の實尊かりけり。
せまりくる山の高さにをのゝきて戰場ヶ原にわたたてるかも。
かの山にかゝりし雲の深ければ我がふるさは曇りてあるらし。
山とよむ瀧の響にひら／＼と秋の木の葉のたえず散るかも。
木の間よりやう／＼廣く見えてゆく湖うみの嬉しき湖うみの明るさ。
やう／＼に宿の軒燈みえし時心にはかにいさみけるかな。
やゝぬるき湯槽の中に安らげく疲れし身をはひたす嬉しさ。

中山 八千代

日光にゆきける時

あさ汽車の窓すれ／＼に名も知らぬ秋の草々可愛くも咲く。
はら／＼と風なきに散る落葉をはあかすなかめて戀ふる故里。
ひや／＼けき秋の霜ふみのほりゆく白樺たつ戰場ヶ原。
ほろ／＼と檜の實おつる山道に幼な遊ひの日を思ひ出つ。
薄墨の雲のちきれが流れゆく山あひさひし旅の夕暮。
汽車の窓夕さひ色の身にしみて野火の煙に旅心しぬ。

文科二、三 安 吉 ます

わかこころ

わかこころしつけかりけりそのあさはかせのすさふにかかはりもなく。
さひしさはうれしけれともいくつかのともしてけりをみななるまゝ。
あいらしきなそのことくにおもはれててにとりてみぬことにつめばこ。

文科二、四 梶 原 千代子